

# ジェームズ・デニーの生涯と神学(五)

松浦義夫

## 序論

「史的イエス」と「歴史的聖書のキリスト」という、イエス・キリストという歴史上に存在した人物に対する、区別と統一、このことに関する問題は、ジェームズ・デニーの時代に限らず、現代においても、こと「キリスト論」を述べる際には、決して避けて通れない問題である。というよりは、まさにこの問題にこそ、「キリスト論」の中心があるといえよう。

我々と何ら変わることなく、人間として生まれ、愛し苦しみ、そして死んでいったイエス、人類の歴史の中で、一粒の種にしか過ぎないといえるような存在としてのイエス、そのイエスに、『聖書』の記者たちおよび後の「キリスト教会」は、「キリスト」という名を付けるべき存在、すなわち、人類全体いや世界全体の運命を制する存在を見出したと告白するのである。

この一人のイエスが、キリストであるとする告白、これこそが、「キリスト論」の中心の問題なのである。

キリスト者たちの信仰の中で、キリストの占める位置は、他の世界的宗教の創始者たちがそれぞれの宗教の信徒たちの信仰の中に占める位置とは、きわめて相違する点のあることを認める必要がある。すなわちユダヤ教徒にとつてのモーゼ、仏教徒にとつてのシャカ、イスラム教徒にとつてのモハムマッドなどが占める位置とは、決定的に異なる位置を、ただこのイエスという人物にだけ認め、キリストと呼ぶのである。これらの世界的宗教の創始者たちの思想は、今日に至るまで、何億もの人々の心を支配して来ているわけだが、彼らの持つ重要性は、主として「史的」な重要性といえる。すなわち、彼らは、後の歴史の上で大きく展開していく、一大宗教運動の先頭に立ち、その運動の先

駆けとして、第一歩を歩み出し、さらに後の方向も示したと言ひ得るが、それが全てである。この点で、キリストとは決定的に異なるのである。すなわち、キリスト教は、単に過去の存在であるキリストだけではなく、現存の存在、すなわち、現に生きている存在としてのキリストにも依存しているのである。「思想」という言い方を「信仰」という表現にかえていえば、キリストは、信仰の先達というだけでなく、むしろ信仰の対象とされているということである。そういった意味で、『新約聖書』に描かれているキリストは、最初から最後まで、信仰の対象としてのキリストであるわけである。「史的存在」であるイエスを、「信仰の対象」であるキリストとして描いている。それが『新約聖書』である。したがって、そこには、キリスト教会の初期の「キリスト論」が、含まれているといえる。

ここで一つの疑問が当然のこととして起こってくる。すなわち、『新約聖書』では、キリストは「信仰の対象」として描かれているというが、「信仰の対象」とは「神」にはかならないのではないか、しかし、イエス自身は神に祈っているのではないか、すなわち、イエス自身の「信仰の対象」は神であるのに、その神に祈るイエスを、キリストとして「信仰の対象」にしてい

るのが『新約聖書』であることになりはしないか。はたして、このようなことがイエス自身の意図していたことといえるのか、いやむしろ、イエスをキリストとして「信仰の対象」としたのは、イエスの意図に反して、弟子たちが行ったこと、いいかえれば、弟子たちの誤解に基づくのではないか、という疑問である。すなわち、「キリストの信仰」と「キリストに対する信仰」とでもいうべき区別である。「キリストに対する信仰」を明確に表現しているのは、パウロを中心とする、キリスト教会の初期の宣教師たちである。イエスの「神の国宣教」とパウロらの「キリスト宣教」とは、連続しているものなのか、あるいは断絶しているものなのか、この疑問が、「キリスト論」の根底に横たわっている。「イエスに帰れ」という主張が生じるのも、このような問題に由来するわけである。

ジェームズ・デニーが『神学研究』を著した当時、この「イエスに帰れ」という主張が最も盛んになされたわけであるが、それに対して、彼は、『神学研究』の第二章および、第三章において、この問題に答えている。その際、後の教会のなした「キリスト告白」なし、「キリストに対する信仰」は、イエス自身に溯るものと言ひ得るのかどうか、という点から出発する。

もしイエス自身が、自らに對する信仰を弟子たちに求めた、ということが明らかになれば、イエスの「神の国宣教」と弟子たちの「キリスト宣教」は、連続ないし当然の展開だと言ひ得るが、イエス自身が自らに對する信仰を弟子たちに求めたのではないならば、「キリスト宣教」ないし「キリストに對する信仰」は、弟子たちの創作ということになるわけである。

我々としても、ジェームズ・デニーの論旨の進め方に従つて、イエス自身の「自己理解」から見て行くことにする。その際重要になつて来る資料は、『共観福音書』である。

## 第一章 神の子

ジェームズ・デニーは、イエス自身の「權威」の問題から出發する。

「私の考えとして、福音書の読者の誰にも深い印象を与える事柄であり、しかも彼（イエス）が語るのを直接聞いた人々には、それとは比較にならないくらい強く印象付けたに違ひないであろうと思われる事柄は、イエスによつて要求されかつ実行された、彼の持つ道徳的權威である」。<sup>註</sup>この「權威」の表出をデニーは、

イエスの「言葉」と「行為」に見るわけである。以下デニーに従つて、この点を見て行くことにする。

キリストは、彼以前の宗教の完成者であることを、權威を持つて要求する。キリストは、彼以前の宗教、すなわち『旧約聖書』の宗教の中に、神の眞実の啓示が存在することは認めている。「神殿」を、彼の「父の家」と呼び、救いはユダヤ人のものであると断言する。『律法と預言者』と呼ばれていた、『旧約聖書』の書物に親しみ、その価値をはつきりと認めている。しかし、彼は、直接的また間接的に彼以前の宗教が、キリストである彼自身を目標とするものであり、彼において終結するものと言明する。

ジェームズ・デニーは第一の例として、イエスの『旧約聖書』に對する言明を採り上げる。今日の聖書学的見地からすると、イエス自身の言明というより、福音書記者の言明といった方が妥当だと考えられるが、むしろ、福音書記者あるいは弟子たちに、イエスの口を通して語らせるように働きかけた動機ないし彼らの意図の背後には、イエス自身から受けた印象、イエス自身がどのように自己を理解していたかという印象、弟子たちの解釈を導いた、イエス自身の姿を認めてもよいのではなからうか。

「彼は、最も神聖な預言を、自身に当てたものと理解する。すなわちナザレの会堂においては、『イザヤ書』の第六章の聖句、『主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために』、を自身に当てて語り、(最後の晩餐の行なわれた)二階の部屋においては、罪の赦しに基づく新しい契約を示すものとしての、『エレミヤ書』の第二章を自身に当てて語る。このどちらの場合も同様に、彼の言おうとしていることは、この聖句が、今日それを聞く者たちの前で実現したということである。そして、これらの例は、彼(イエス)の語るすべての言の底に流れる、自己理解の表明のほんの一例にしか過ぎない。すなわち、『律法と預言者』、それは単に『聖書』の語句だけに止まらず、『旧約聖書』の宗教が全体として、彼において完成されるということ、完成されるのであるから彼によって取って代られる、ということである。ここでじっくりと考えていただきたいのは、真の宗教が世界に存在しているその状況の真っ只中であって、自分こそが、その宗教によって目差されている目標そのものであると、少なくとも自己の意識においては感得している彼、この人物は、いったいなんといいたいした存

在なのだろうか、ということである。神が、アブラハム、イサク、ヤコブを召したのは、この私の為である。私を目差している。と彼は明らかに語った。神が、モーゼを通じて、イスラエルの民をエジプトからの脱出に導き、律法を与え、預言者を通じて、歴史の教訓を読み聞かせ、未来をほのかに予示したのは、この私を目差してのことである。神の摂理と救済の御わざの全行程が、何世代にもわたって実現されて来ているのは、この私を目差してである。これらすべての律法、預言、制度、破局、救出、啓示は、正当化されるとすれば、すなわち、存在すべきものとして、神的権利を持つものとして指示されるとすれば、それらがこの私において完結するがゆえである。私が言いたいのは、ここには、なんと大胆な要求が含まれているかということ、またなんと比類のない要求が含まれているのかを、よく考えていただきたいということである。今日の我々にとっては、イエスがキリストであると発言するとき、それはほとんどあるいは全く何の意味もないように感じられる時がしばしばある。しかし、イエスがキリストであるということの意味しているのは、正にこのことにほかならない。我々が発言するのではなく、こと彼すなわちイエス自身が発言し、この要求が彼によっ

てなされる時に意味しているのは、正にこのことなのである。そしてもしこういって要求が、正当なものと認められるとするなら、ここではそれが当然認められることとする前提に立っているのであるが、正にこの要求のゆえに、イエスは、他の誰も彼とは共有できない位置を占めている、ということになるのである。<sup>註</sup>このように、ジェームズ・デニーは理解する。

ところでジェームズ・デニーの活躍した時代、すなわち一九世紀の後半から二〇世紀の初めにかけては、「道德の教師」としてのイエス、ということが盛んに言われた時代である。このような事情は、今日においても、変わっておらず、かなりの人々が、イエスをそのように理解していると思われる。しかし、ここで注目すべき点は、ジェームズ・デニーも言っているように、このように大胆に、だいそれた事を、しかも自分自身に当てはめて発言するイエスが、たとえ弟子たちの理解あるいは主観を交えて表現された姿だとしても、はたして「道德の教師」などと言いつるのか、ということである。「道德の教師」であれば、いくら何でも、十字架にかけられることもなかったのではないだろうか。イエスのなした要求には当時のユダヤ教の当局者にとつては、けつして認めることのできない内容を含

んでいたのだと、考えざるを得ないのでなからうか。イエスの持つ「道德的權威」について、ジェームズ・デニーは、さらに論を進める。

「イエスによって実施された、道德的權威の表出は、部分的には、それまでは神的權威を有する事柄とされていたものに対してさえなされる。彼による批判や、時には彼が適當と感じれば、それを廃止しようとするやり方の中に表現される。『あなたたちはかつてこのように言われたと聞かされているだろうが、……しかし私はあなたたちに言うが』、というのが彼の表現である。彼は、聖なる歴史の中で、最も尊敬されて来た人物や、制度を自己と比較し、それらの劣位を宣言する。ヨナより偉大な、いやむしろヨナ以上の者、ソロモン以上の者、神殿以上の存在が、そこにいるわけである。彼は、一言のもとに、すべての食物を清いものとなし、實質的に『レビ記』による食物規定を廃止した。彼は、ユダヤ人たちによる、安息日に関する規定を、その規定によって目差されている、本来の神の意図と置き換えた。またユダヤ人たちの婚姻の規定を、婚姻に関する神の理想的考えを導入する、別の規定と置き換えた。これらの行為は、たしかに、權威という表現の下に、今まで述べられて来た事柄の当然の結論

にすぎない。しかしながら、イエスが語ったり行ったりする時の、自然さと断固とした態度の中に、自己が靈的權威であり、他のすべてはそれに対して下位にあるという自己理解を、彼がなんと深く、また何の苦もなく表明してしまっているのかということをも、我々は見出すのである。彼は評論家ではなく裁判官である。彼のなす判決は、個人的な意見の表明などではなく、律法としての重みを持つものである。それは無効を宣言すると同時に、創造的なものでもある」。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という、イエス自身の問いかけに対する答え、それが「キリスト論」の課題である。ジェームズ・デニーの描き出す、イエスの姿に対して、当時のユダヤ人なら、どのように答えただろうか。今日、ユダヤ教においては、イエスを「ラビ」の一人であったとする認識が、多く見受けられるようであるが、それでは、近代神学や自由主義神学の中に根強く見受けられる、「道徳の教師」と同様の認識ではないのだろうか。単なる人間にすぎない者が、イエスの言ったようなことを言ったとしたら、そのような人間は、「道徳の教師」あるいは「ラビ」どころか、精神異常者と看做されるか、「悪霊の頭ベルゼブル」すなわち悪魔と看做されるか

のいずれかであろう。福音書記者たちの記述によるかぎり、イエスは、当時のユダヤ人たちには、悪魔と看做されたからこそ、死刑になったと考える以外に、説明がつかないのではないか。

以上見て来た事柄は、対ユダヤ人、対ユダヤ教という観点に立った、イエスの姿であった。次にジェームズ・デニーは、対弟子、すなわち、弟子たちに対して、イエスはどのような言明、要求をしているか、という観点に立って論を進めている。

「キリストとしての權威が行使されるのは、第一にあげるべき場合としては、主として、個人的服従と信頼を要求する際に認められる。イエスが人々に呼びかける言は、要約すれば、私に従いなさいという言葉に尽きる。我々が、この言を理解する時に、実際ほとんど本能的にそうしてしまうように、この言を比喩的なものとして受け止めると、この言の持つ意味が薄められてしまうのである。最初に呼びかけられた人々は、この言を、文字通りの意味においても受け取らなくてはならなかった。このように理解された時には、この言は、キリストに対する、自己の生活全体の完全な放棄を意味した。我々が福音にある種の恩恵に満ちた命令というように看做す場合、応々にして無意識のうちに、

恵みを安価なものとしてしまっている。しかし、イエスはけっしてそのようなことはしない。彼の内にある救いは、単なる恵みではなく、召命でもある。この恵みの価値を評価し、代価を払う準備ができている者たちに対してなされた、値段の高いものにつく、呼びかけであるのだ。彼にとっては、人々から要求するのをためらうような、どんな犠牲も存在しない。『もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。……自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのただ一人としてわたしの弟子ではありえない』。まことに高貴な身分にある者でさえ、たとえそれが、社会的正義のためとはいえ、このような犠牲を他人に要求することに責任の重さに圧倒されてしまうものだが、……キリストは、自分自身のために、途方もないような犠牲を求めるにあたって、いささかのためらいも、思わず漏らすということさえしないし、彼に対して、決してしりごみしないような信頼と服従をすることを要求する際にも、いささかの躊躇も見受けられない。……

イエスは人々に対して、その全存在を彼にあげわたすことを要求する。……神以外の何者も、このような絶

対的信仰を求める権利はない」<sup>註</sup>、すなわち、ジェームズ・デニーの理解によると、イエスは、キリストとして、弟子たちに、ただ神にのみ属す権利でもって、完全な服従を要求したということになる。

『旧約聖書』の宗教の完成者であり、それゆえ、神の救済の働きの目的遂行にあたって自己の占める役割が、他の何者によっても取って代わられることのないものであるとの自己表明。古い啓示を批判し、さらには必要とあれば廃止する権威ありとの、キリストとしての自己表明。弟子たちに対する、全き信頼と服従の要求。これらの事柄は、イエス自身の内において、自分こそまさに、神に対する独自の知識を持ち、神の意志を独一的に理解でき、神との独一的関係にある存在であるとの自己理解を持っていることの表明と認識すべきだ、ということになる。これらの表明は、しかしながら、含蓄的なものであり、あらわに明示するものとは言えない。そこでイエス自身が自己をどのような存在であるかと、明示的に証言している事柄を調査する必要が、どうしても生じて来る。ジェームズ・デニーは、この点に関して、次のように指摘している。「福音書が、他の何物にもまして、これこそ疑う余地のない事柄であると看做している事柄があるとすれ

ば、それは、イエスが神に関する独自の知識を持つと自ら称すること、そのように称する根拠は、彼と神との独自の関係に基づくことにあるとの自己証言をなしているという事実である。彼は神のことを、父として啓示し、自身がその子であるという認識のゆえに、このようなことが行なえるのだとする。たとえ第四福音書を除外してみても、このことは、史実性がきわめて確実な事柄と言える。たしかに、『マタイによる福音書』、『マルコによる福音書』、『ルカによる福音書』において、イエスが自らを『神の子』と呼ぶ場合は、けっして多いとは言えないというのは事実である。しかし、彼は神のことを自らの父と、再三再四にわたって呼んでいるのである。最近の神学においては、神の父性という考え方を、おおいに拡大し、やっきになって、人類全体と神との関係を、規定しようとしているが、このような問題に関心を持つあまり、イエスによって称される、自らと父との関係が、全ての人が、その存在の創始者である神との関係に占めるものとは、何かまったく異なった種類のものである、という事実、目を背けることがあってはならない。彼は、子供たちのうちの一人というのではなく、唯一の御子なのであり、彼を通してのみ、御父が世に示されるのである。

彼の御子性が神秘としてこの世に存在するのは、神の御父性が神秘であるのと同様である。この両者は、必然的にけっして分離できない関係にあるのである。イエスは、『子を識る者は父以外にはなく、父を識る者は、子と、子が現わそうと望む人々以外にはない』と語った。この神との比較を絶した関係、この彼のそして彼だけに許された神との関係は、キリストの自己理解に位置を占めている。彼は、このような立場でのみ自己を理解し、これ以外の立場では自己を理解しなかった。彼は自己のことを、そのおかげで、御父に対する知識が人々に流れ込むことのできる、唯一の源泉と意識した。暗闇に座し、死の影に住む人々を照らすことのできる、偉大な光がそこから発して来る、唯一の光源としての自己を意識した。彼がどのようにして、このような自己認識に至ったのか、いいかえれば、キリストにおける、御子であるとの意識の成長とは、どういうものであったのか、というようなことは、興味のある問いではあるが、我々の議論を引き止めるほどのことでもあるまい。ただ、彼が公生涯における宣教にのり出した時までには、完全に一点の曇りもなく確固としたものになっていたということと、彼の生涯の中で重大な危機の場面において、特に印象的な啓示に

よって証言された、とだけ言っておけば、それで充分であろう。』<sup>註</sup>このように指摘した後、ジェームズ・デニーは、彼自身の表現によると、「重大な危機の場面」として、「イエスの受洗」、「山上の変貌」をあげているが、これに、「ゲッセマネの祈り」の場面も加えてもよからう。前二場面では、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という、神による啓示が、イエスに対してなされ、それによって自らの御子性に対する証言が与えられたとの意識が、イエス自身の認識の中に存在したことを示しており、第三の場面では、「父よ、できることならば……」とのイエス自身の祈りの言において、自らの御子性の認識を示している」と理解できる。少なくとも、福音書記者、あるいは生前のイエスに直接に接していた弟子たちには、イエスのこのような姿が強烈な印象として受け取られたと言えよう。この神の父性に関して、ジェームズ・デニーは、聖書学的な事実として、さらに次のような指摘をしている。

「イエスは、事実しばしば、神を、父、私の父、あなたたちの父と呼んでいるのではあるが、自分自身を、たとえそれが弟子たちであったとしても、含めた意味で、我々の父というようには、呼んでいない。私の父

でありあなたたちの父である方』、『私の神でありあなたたちの神』と、彼は復活後には語るが、このような区別の仕方は、最後まで一貫している。<sup>註</sup>つまり、イエスが、神を父と呼ぶ場合は、様々な宗教に見られるような、人類全体の父というような意味ではなく、彼だけの父、表現をかえると、彼だけがその父なる神の唯一の子であるとの認識、このような自己認識に立って、自己を理解しており、これ以外の認識では、自己を理解していなかったことの現われだと言えるわけである。

以上のような、ジェームズ・デニーの指摘から、結論として言えることは、次のようなことになる。すなわち、イエス自身には、ただ彼だけにのみ妥当する意味での、「神の子」としての自己理解ないし自己認識というものが存在し、彼の行動、言動は、この前提に立つことによって、理解できる、ということである。このように、自らを神に等しい者として人々に示し、「あなたがたは、私を何者だと言うのか」と問うイエスに対し、人々は、二者択一を迫られるのである。すなわち、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と告白し、全存在を完全に彼に明け渡し服従するか、あるいは、「神を冒瀆する者、悪霊どもの頭ベルゼブ

ル」として打ち殺すか、さもなければ、精神異常者として監禁するかのどちらかし、対処の仕方はないのである。この二者択一の問いに迫られ、弟子たちは、イエスを「神の子」と告白し、信仰の対象となしたのであり、当時のユダヤ教の当局者たちは、彼を十字架に付けるため、ローマ帝国の代表である、ポンテオ・ピラトの手に引き渡したのである。

## 第二章 人の子

キリストとしての、イエスの自己理解を認識するにあたって、極めて重要な役割をはたしているのは、「人の子」という称号であろう。この「人の子」という呼び方は、イエス自身の口から語られる用語の中では、特に頻度の高い用語である、というだけではなく、生前のイエスに対して用いられる時は、イエス自身の口からのみ発せられる用語であることを考えると、弟子たちの記憶というフィルターを通したものであれ、イエス自身の自己理解を示す、極めて重要な役割を担っている表現といえよう。

この「人の子」の概念に関しては、哲学的教義学的、信仰的といった、様々な方面から議論のなされて来た主題ではあるが、いくつかの点では、一般的合意に達

している。そのうちのひとつとしては、この用語が、『ダニエル書』の用法に由来している、という意見である。「お前はほむべき方の子キリストなのか」との大祭司の尋問に対して、イエスが「そうです、あなたたちは、人の子が全能の神の右に座し、天の雲に囲まれて来るのを見る」と答えたという記述においては、疑問の余地なく『ダニエル書』の用法が念頭におかれていると考えられる。この表現は、『ダニエル書』の第七章一三節以下に見られるもので、「人の子」の概念も、この表現に基づいたものである。

ジェームズ・デニーは、この『ダニエル書』での「人の子」の用法と、イエスの自己理解の表現としての「人の子」の用法を、極めて的確かつ説得的に述べているが、次に、この点に関する彼の記述を引用することにしよう。

「ダニエルの見たという幻には、極めて簡潔な輪郭の形でもって、一種の宗教的歴史哲学が描かれている。すなわち、最終的の神による統治の実現に至るまでの、この世における諸勢力の栄枯盛衰の略図が描かれているのである。預言者は、四つの獣が、次々と海から出現し、支配するのを見る。彼らに共通しているのは、彼らが獣である、すなわち野蛮な貪欲な、破壊的存在

であるという事実である。しかし、彼らにもやがて衰える日がやって来る。彼らによって行使されていた、支配権は彼らから取りあげられ、人の子のような者に手渡される。そして、このところで、例の幻は最高潮に達する。獸的統治は人間的統治へと引き継がれる。利己的、暴力的支配は、理性と善意による支配へと引き継がれる。そして、この最後の支配が、全世界的で永遠のものとなる。イエスが、自分自身を示すのに、人の子という用語をしようした時に、すでにこの用語には、以上述べたような歴史的に先行する用法があったのである。すなわち、親近性と神秘性を併せ持つ用語であった。この用語には、後で述べるように、默示的側面があったし、イエスもそのような面を放棄していないが、この用語の主要な意味を決定しているのは、この用語すなわち、人の子と、ライオン、クマ、ヒョウ、ライオンの齒を持つ恐ろしい獸などとの著しい相違である。イエスがこの用語の意味を定義し、自己を示す用法とした時、すなわち、『人の子のような者』を『人の子』と変え、ほとんど『私』の迂言表現といえるものとして使用した時、彼は、そのことを理解できる者たちに対して、彼自身の自己理解、すなわち、彼が、新しい、全世界的な、永遠の統治、王国におけ

る、主権者であり、彼の王国においては、真に人間的な事柄のみが支配しているのだということを、暗に示そうとしたのである。野獸による支配は終わりを告げ、今や人間の支配のための時がやって来た。人類はイエスにおいて、支配権を主張した。これこそが『人の子』という用語の、根本的概念であり、それと論理的につながってくるすべての事柄を包みこみ、説明するのである。<sup>註</sup>

ジェームズ・デニーの「人の子」という呼号に対する理解に従えば、従来なされて来たような、「理想的人物」すなわち、神が本来意図した人間の姿を実現したものの、という「人の子」に対する理解は、事柄の一面をたしかに捕えてはいるが、神の歴史的救済計画現の中に占める、イエスの位置とは、何らの関係なしにも理解しようと思えば、理解できる存在といえる。したがって、イエスが「人の子」を自らの呼号として用いた理由の全体を捕えてはいない、ということになる。あるいは、「人の子」は、人間の持つ弱さの位置にまでへりくだった、キリストの優しさ、人々に対する同情を示すものである、という理解も、この呼号の持つ、「支配権」という概念との関係でいえば、何か不十分な点があることは、否めないであろう。しか

し、「支配権」という概念を、何らかの力による支配、専制的意味を持つものというように理解すると、「人の子」という言の持つニュアンスからは、かなり離れてしまう。むしろ、イエスは、この「支配」という人間の行為を、ラディカルに再解釈して、「人々に仕えること」という意味に用いているのである。すなわち、「人の子」に従うということは、全人格でもって人々に仕えた、イエスに従い、自らも、全人格でもって人々に仕える、ということを意味している。しかも、イエスは、そのように弟子たちに対して、要求できる権威を持っていることを示しているのである。

「人の子」という称号の持つ概念の他の側面および、イエス自身の自己理解に関する議論は、紙面の制約上、稿をあらため議論を進めることとする。(以下次号に続く)

注 (一) Denney, J, *Studies in Theology*. London, 1904, P26.

(一) *Ibid.*, P27

(三) *Ibid.*, P28

(四) *Ibid.*, P29

(五) *Ibid.*, P31

(六) *Ibid.*, P33

(七) *Ibid.*, P35